勢州阿漕浦

一

平治佳家段

〔解題〕本外題は「田村麿鈴鹿合戦」。寛保元年九月十日から豐竹座上場。作者は淺田一鳥・豊田正藏。天智天皇の御代逆賊藤原千方高圓山に隱れて妖術を學び、百八十餘歳の長壽を保ち、桓武帝の御代に隱者周翁と稱し、水鬼火鬼を驅使して三種の神器を奪ひ（その中十握の寶劍は伊勢の海へ落す）、皇弟氷上皇子と藤原小黒丸とを與黨として天下を覆さうとする。柱石の臣坂上田村麿謀計を以て神器を奪還し、神鏡の威力によつて周翁の心膽を奪ふ。是より先田村麿の女春姫と戀に陷つた爲に主君の不興を蒙り且父桂平内兵衛照房の勘當を受けた田村麿の近侍桂平次清房は、父の横死後母と春姫とを伴つて阿漕浦に隱棲して阿漕の平次と稱へ漁師となつて世を渡つて時を待つ。母の難病平癒のために戴帽魚を得んとて太神宮の贄魚の禁漁區に網を入れて圖らずも一振の名劍を得た。これは先年妖賊が落した十握の寶劍である。併し巡檢者の爲に證據の簑と笠とを押收されて制規の處刑を受ける事となる。そこへ平瓦治郎藏が出て問答の末身代りに立つ事となる。この次郎藏は實は三種の神器を守護して居て妖賊に奪はれた笠縫の神職卜部友久の養子中川宇内といふ者で、平次の家來筋に當り、父を救ふ爲に寶劍を探索中のものであつた。かくて平次夫婦は上京して寶劍を田村麿に上る。三種の神器が揃つたので田村麿はこゝに逆賊を鈴鹿山に攻滅し、平次は小黒丸を討つて父の仇を報じるといふ筋。五段より成り、初段は宮中記錄所、樽井田村館、笠縫の宮舞樂の場、第二段は春日野藤の鳥居側の茶屋、桂平次館口・切、

第三段高岡山狩場、周翁庵室口・切、第四段「道行しるべの駒」、阿漕浦濱の段、平次住家段、第五段鈴鹿山合戰大團圓と分れて居る。こゝに收めた平次住家の段が全篇の山で、最も名高い。所收の文は五行稽古本によつたが、原本と殆んど同文である。

外題の「田村麿鈴鹿合戰」は、「勢州阿漕浦」を割つて角書にし「鈴鹿合戰」とした正本もあるが、今日では「勢州阿漕浦」の外題が行はれて居る。これは文化五年正月御靈境内の芝居で、當代の名人三世綱太夫が平次内の段を語つた時に改題されたらしい。

本曲の原據となつた阿漕の平次の傳說は、古今六帖の「逢ふ事も阿漕が浦に引く網もかず重らば人も知りなん」の和歌と、伊勢阿濃郡の皇大神宮の贄魚の爲の禁漁區への密漁犯とを結びつけたものと思はれるが、謠曲の「阿漕」に仕組まれて名高くなり、古淨瑠璃に「あこぎの平次」といふがある。これを原據として作つたものである。

阿漕が浦の場

へ立退きし。地フシ故郷は都。こゝはまた天照る里と言ひながら。鄙の住居に春姫は。名をばお春と改めて。スエ爲し馴れぬ業も網の目に。溜る繼路の種產んで育つる世話と姑の。病氣の世話と世の世話と數重なりし阿漕が浦フシ住むも貧しき風情なり。フシ仕習ひ易き下司仕事。網すく中に姑の加減の藥煎じ上げ。心に藥師の文唱へ。用ひさへすりやその儘に。驗もあろかと女氣の。いそ〳〵として一間の口。詞申し〳〵お袋樣。今日はお醫者の加減のお藥。上りにくからうとも私らを不便と思うて上つて下さりませ。サアお起んなれ。地お手取りませうと。フシ障子明くれば母親は。苦しきふりを押隱し。詞オヽ嫁御誰もないか。平治や孫の友石も見えぬが。どつちへぞ行きましたか。イヤ。主は夕お醫者樣を送り。それから直ぐに夜通しの。小揚に雇はれたとて。今朝あけ方に戻られ。奥に休んで居られます。友石も今晝寢。どつこへも行きは致しませぬ。地フシマアお藥と差出せば。地押戴き〳〵。アヽ冥加なや誰あらう。田村將軍の御息女。詞春姫樣ともあらうお方に。煎じさして用ゆる藥は。地耆婆扁鵲の配劑で。飲むより尊いこの良藥。いかなる重い病でも。本復せいで何とせう。詞有難う御座りますと。地老の叶はぬ。手を合せフシ泣く音も。地弱る有樣を。地見れば胸迄せきのぼす。涙を袖に押包み。詞オヽお袋樣とした事が。あられもない事おつしやりますな。櫻も花の時は歌に詠まれ詩に作られ。衣打つ物となつては。庭に捨てられ下家の住居。ハテ昔は昔。今は阿漕の平治が女房お前の嫁。其樣にけつこはつこにおつしやるは。心に隔てのあるといふもの。地聞えぬ仰せや怨めしやと。主筋はなれ水仕から。嫁に成つたる嫁氣質。冠は齊に履かれねど。齊は冠とフシ戴かん。詞ホヽさうあらうと思うて。わざと是迄嫁あしらひ。地時代につれると言ひながら。餘りと言へば勿體ない。詞アレまだ譯もない事ばかり。其樣におつしやると。世間の聞え夫の思はく。私は爰に居られませぬ。但し家出せいとの事か。地と言はれて母は俄に笑顏。詞ホヽヽオヽさうぢや〳〵誤つた。やつぱり嫁ぢや娘ぢやと。地機嫌とる氣の姑に。いうて悔しき捨詞。フシ是非も涙の折からに。地表へ人音何にもせよ。お氣に構ふとお春は氣を付け。フシ障子ぴつしやり引立つれば。詞平治は宿に居らるゝかと。地によつと這入るは庄屋の彦作。詞コレハ〳〵名主樣。何と思う

てようお出で。マアお茶 ッシ煙草と饗の所。雜魚一尾捕つても簀卷にして沈めにかける。それにマア大膽な。この間から夜な〳〵網を打つ者があつて。昨誓文。たとへ此子を奈落の底へ。ャこ應せば。詞ハテ何時來て見てもほれぼれと。口は濡れねど。詞はうまい嗅煙草ぢやの。扨と。爰の平治に一寸逢うて尋ねたい事がある。内になら呼んで下され。アイ〳〵幸ひ奥に休んでと。地何の氣もなく勝手口。詞コレ平治殿起きさしやんせ。彦作樣が逢はうとおつしやる。早う〳〵。地と呼出す。聲は平治が胸板に。打たるゝ釘の先折つて。言ひくろめんとつか〳〵立出で。詞エコリヤ庄屋殿お出で。扨も寢れば寢らるゝもの。一昨日から寢つゞけ。まだ目が覺めぬと ッシ大あくび。詞ハレ途方もない長寢ぢやの。そんなら貴樣は知るまいが。今朝から村は大騷動。エエそりや何で。さればいの。知りやる通りこの阿漕が浦は。大神宮の御領。御贄調進の漁場にて。昔より殺生禁斷りや〳〵女房どもそりや何をいふ。それでもお前。イヤハテ誓言立つるも事によるわい。コレ庄屋殿。さうおつしやると此平治が。網打つた樣で聞捨てにならぬ。ソレ女房。脇差おこせ。地但し證據があつての事か。胡亂な事なら名主とは言はさぬと。覺えある身は空鞘の ッシ返りくはして極付ければ。詞アヽコレ〳〵扨もこなたは短氣な人ぢやわいの。何にも證據はなけれども。懇ろだけに一寸搖つて見たんぢや。アアコレ腹立てゝ下さるな〳〵地とわな〳〵震へば平治も落付き。詞さうおつしやれば私が慮外。お赦し〳〵。シテ又。お上の御評議はどうぢやな。サレバイノ。あなたはお慈悲な事。殺生禁斷の場所へ網入れた者は。是まで從類を絶やせども。我と名乘つて出たらば。

妻子親類にお構ひないとの仰せぢや。若しあなたから御詮議に逢うて。顯はれると從類遁れぬ。そこを思うて萬一覺えがあらば。貴樣一人で埒明けるつもりぢや。こりやコレ。皆貴樣の爲ぢや。ア、コレコ、、腹立てまい〳〵。腹立てまいぞや〳〵〳〵アハ、、、。さて厭な事は。その網打つた場所に。簑と笠とが落ちてあつたげな。コレ腹立てまい〳〵。腹立てまいぞや〳〵〳〵ハ、、、。さて其笠の裏に。平の字と治の字と。コウ向ひ合せに書いてあるげな。アコレ腹立てまい〳〵。村中を詮議しても。治平といふ名は一人もない。そこで〳〵こいつは若し平治の平。へ、、いやさ。何ぼ貴樣が味な顏しやつても。一村の束をする庄屋の役ぢやによつて。言ふ事は言うて見にやならぬぢやないかいの。そこで〳〵。こいつは若し。平治ではあるまいかと。ひよつと思うて問ひに來たのぢや。覺えなければ先づ目出度い。祝ひ事に晩に來う。お嗚さらば。オ、坊よ。テモ大きう成つたなと 追從輕薄はく草履。雪駄片足と引つかけて。足ばやにこそ。逃歸る。地平治は跡を打眺め。思案途方にくれ居たる。地妻はよもやと思へども。心ならねば傍に差寄り。詞コレ平治殿。禁斷の場所へ網打つたを。夜な〳〵と言ふので案じもないが。昨夕こなさんの戻り樣。さんばら鬢で色眞青。喧嘩でもした體。その上着てござんした簑笠は。どこに置いて戻らしやんした。わしやそれが氣遣ひなと。地問はれて詮方聲ひそめ。詞全くこの平治夜な〳〵網打つ覺えはないが。ふとした事で昨夕初めて網を入れ。見附けられたが絶體絶命。エ、そりや又お前何の爲。慰みにか慾にかと。地そゞろに問ひし妻の顏。打眺めて。詞鱗を漁つて慰むとは。榮耀の上の戯れ事。次第に重る母の難病。涙を浮め。今一度御本復と祈れども。身貧なれば大醫を賴む力はなく。一僕連れぬ懷醫者。昨夕送つて往た道で。戴帽魚といふものを。捕つて與へば本復あらん。さもなくては今度が旅立ちとの物語。その戴帽魚は俗にやがらといふ魚にて。禁斷の場所へは必ず寄集るとの敎へ。隱し目附のありとも知らず。かの魚を得んと思ひ。一網入れたに思ひの外。その魚は上らずして。地玲〻たる名劒の。網にかゝつて上りし不思議。詞是ぞ正しく十握の寶劒。海中に沈みしと聞きしが。自然と我が手に入りし事。ハアハ、、、運に叶ふ瑞相と悅び勇み。また一網入れんとせしを。地番

の者に見附けられ追つ取卷くを。命限りに働いて。まんまと遁れ歸りしが。惡事千里と事顯はれ。我こそ罪に沈むとも。御身は是より都に歸り。詞御父田村將軍へ寶劍を奉り。勘當御免蒙つて。母の養育賴み入る。地不思議の緣で是までは夫よ妻よと主從の。道を忘れて妹脊の語らひ。思へば盧世が夢の樂しみ。覺めて悔しき身の上と。スエ男泣きにぞ泣き居たる。地聞くに悲しさやる方も。涙にくれて女房は。暫し。フシ詞もなかりしが。地やゝあつてコレ平治殿。詞たとへ寶が手に入りしとて。御大病の母御といひ。目の前罪に行はるゝ夫を殘し故鄕へ。地どうまあ見捨てゝ去なれうぞ。四人一緒に此家を立退き。影を隱す氣はないか。この友石が可愛ゆくば生延ばはつて下されと フシカゝリ口說き。歎けば友石も。詞地ヤレ待て平治用があると。聲をかけて母親は。一間の內より杖に縋つて。よろぼひ出づれば夫婦は驚き。詞五日以來絕食の。ア、お足元も危なしと。地勞はり寄る平治が脊骨。突いたる杖にてはつし〳〵と打叩けば。お春は中に分入つて。お前の病氣を治さうとて。樣々心を碎く夫。何の仕落ちで打擲なさるゝ。何かの事を話したら。可愛やおれ故苦勞すると。身も世もあられぬお歎きを。見るが悲しい〳〵と。泣きしをるれば母親は。病苦に苦しき息を張り。詞ヤイそこな不孝者。恩知らずの狼狽者と。地叱り付けられ平治はひれ伏し。詞ハア、全く心に覺えて粗畧には致さねども。渡世にからまれ御介抱もそこ〳〵。おのづから不孝となれば。その段は幾重にも。イヤ了簡ならぬその譯聞け。昔唐土にも。不義する母の道の苦勞を助けんと。橋を架け

て渡せしに。その母扨は顯はれたりと。子供の手前羞らひ。自害して死したとある。六十に餘る此母が。病苦を助けんと思ひ。殺生禁斷の場所へ網打つたは。孝行に似て大不孝。科人よ囚人よと捕へられ。簀卷にして沈めにかゝるを。此母が見て生きて居られうか。コリヤヤイとても命を捨つるなら。父平内兵衛殿の敵を尋ね。差違へ死んでこそ。孝行とも武士とも。跡に殘るも尾鰭あり。地僅か鱗一尾に。命を捨つるが手柄かや。詞いとしぼさうにあの嫁御の。そち故是まで幾瀬の艱難。未來も一緒に思はいで。其身も末がよからうか。是非叶はずば諸共に。死ねとてなぜに勸めぬぞいやい。地我ばかり罪にあひ。母や妻子に憂目を見する。不孝者胴慾者。地恨めしや腹立ちやと。老の齒莖を。嚙みしめ〳〵。身を震はして歎くにぞお春も道理にクルせき上げて フシ共に。泣入るばかりなり。地かかる歎きの胴中へ。庄屋を案内に打連れて。平瓦の治郎藏が。フシ門口からのさばり聲。詞阿漕の平治殿といふは爰でえすか。宿にならちよと逢ひまし よと。地聞馴れぬえす聲に。疵持つ足の。詞ソレお春。マア母人を一間へと。地言捨てゝ立上り。詞成程平治内に居ります。どなたかお這入りなされませ。イヤ大事ない者でえすと。地庄屋を表に忍ばせて。ずつと通り顏打眺め。詞御の。そち故是まで幾瀬の艱難。未來も一緒に思はいで。其身も末がよからうか。是非叶はずば諸共に。死ねとてなぜに勸めぬぞいやい。地我ばかり罪にあひ。母や妻子に憂目を見する。不孝者胴慾者。地恨めしや腹立ちやと。老の齒莖を。嚙みしめ〳〵。身を震はしの中へ。かゝつた物を貰ひに來た。アヽコレ雜魚ぢやどんせぬ〳〵。是程な光る物ぢや。ハテ惜りせまいてい。直ぐに其時言はうと思うたれど。代官づらが居る前。見たらてつきり上り物。そこを思うて見ぬ振りした。金にしたらば仲間へ入れるは。二つ山ぢや〳〵。四の五のなしに下んせ〳〵〳〵は地フシ伊勢路にはやる詞かや。地平治はこいつしれ者と。思へどわざと馴れ〳〵しく。詞扨は其元は平瓦の治郎藏殿か。お名はかねて承つたが。お目にかゝるは初めて。何やら貰ひ度いとおつしやれども。此方すきと合點が參らぬ。母の病氣で一寸も内を出ず。網打つた事なければ。もとより拾うた覺えもなし。定めてそれは。イヤ人違ひぢやどんせぬ〳〵。この治郎藏が黑い眼で見て置いたのぢや。隱さずと出しやいの〳〵。イヤそりや御無體。覺えのないに何出

さう。ハテまだとぼけ面せまいテ。手目の上つた此塞詞。諍ふな其手ぢや行かぬぞ。イヤモどうおつしやつても覺えのない儀。外をお尋ねなされませ。ム、すりやどうあつても知らぬでえすか。ドレそんなら一寸家探しと。地立つて行けば平治たまらず飛びかゝり襟がみとつて引戻し。詞ヤアあばら家なれども平治が住宅。詞甘きに附上り。家探しとは存外千萬。一寸でも踏込んだら。枝骨切つて斬下げると。柄に手をかけつゝ立つたり。ム、ハ、ハゝム、ハ、ハ、ハ、ハゝ、、、コリヤ面白い〳〵。こいつはよつ程面白いわいハゝ、、、。こりやヤイ。治郎藏が枝骨には性根があるが。地なぐつて見るかと段平物。鯉口くつろげ詰寄つて拔かば斬らんと睨み合ふ。地お春は危うさ堪へかね。二人が中へ割つて入り。隔ての垣と身をなせば。邪魔な女と引退ける。アレ母様怖いわいなうと。縋る子を。抱へてさまよふ其中に。兩方なんなく拔合せ。網にかゝつた劍を渡せ。それを汝がどうして知つたと。互の切先上段下段。打てば開き。なぐれば拂ひ鎬をツシ削り勵みしが。地平治が手練の太刀風にさしもの治郎藏斬立てられ。敵はぬ囮に友石を。もぎ取つて下に引つ敷き。詞サア望みの劍渡せばよし。さなくばこの餓鬼突殺すぞ。ヤレ早まるまい〳〵治郎藏。たつた一言。地いふ事ありと押しとゞめ。詞成程夜前不思議に寶劍が網にとゞまつて。我が手に入りしは入りしかど。平人の持ちなやむべき劍にあらず。仔細あつて我々は。筋目正しき浪人者。此場を了簡するならば。後日の返禮黃金を積まん。ヤア置け〳〵。武士の果てでもわりや科人。追付け縄目の恥に逢ひ。簀卷になる體して。後日の返禮どこからすりや。ごくにも立たぬ願聞かずと。劍を渡すか。サアそれは。こいつを殺そか。サア。〳〵。サ、、、返答はどうぢやい。イヤなうそこが了簡。此場に及んで僞り飾る平治ならず。貴殿男と見て頼みたき事あり何と頼まれてくれまいか。ホ、ウコリヤ面白い。男と見て頼めば引かぬ。こつちの望み叶へるなら。ホ、滿足々々。先づその悴を赦されよと。地漸うに手を放させ。詞某もと田村將軍の家臣。仔細あつて親を討たれ。その敵の面體も有所も知らず。尋ね出さんと思へども。一人の母が九死一生。見捨てゝも行かれず。無念の月日を送る所に。禁斷の場所にやがらといふ魚あり。是を捕つて母に與へば。立ちどころに本復といふを力

に網を入れ。魚は得ずして劍を得たり。これ幸ひの樣なれども。罪科極まる我が身の上。沈めにかゝるを見るならば。母は忽ち生害せん。貴殿何卒老母妻子を引連れ都へ上り。寶劍を主君田村將軍へ差上げて給はらば。其元も天子へ忠節。我これを持つて立退くも易けれども。足弱三人。殊に母は御病中。地コレ治郎藏。田村の家來桂平治なりや。小黑丸樣からのお尋ね者。殊に寶劍持つたれば。注進して褒美は分取り。地取得て養父が難儀を救はんと。夜な油斷すな平瓦と言捨てゝ駈出すを。治郎藏透かさず飛びかゝり。素首ころりと打放せば。是はと驚く其内に。死骸を蹴飛ばし遁にすさり。詞扨は桂平内兵衞樣の御子息平治樣かや。左樣とも存ぜず慮外の段は。ハ。ハ。ハ、、、眞平々々。私儀は中川宇内と申して。親御平内兵衞樣のお側仕。幼少の時兩度まで仕損じ。命も召さるべき所御赦免ありて。和州笠縫の神職。神祇の太夫久方へ養子に遣はされ。御厚恩を受けし某。神祇の太夫は三種の神寶を奪取られ。寶劍は海底に沈みし由。即ちこの阿漕が浦は上浪は靜かなれども。底の青海矢を射る如く。海中に沈みし物打寄せぬといふ事なし。その上此間夜に入つて。海面に光射す事見付けし故。扨は劍の有所と思ひ。何とぞ科を外へ讓らん爲。古主の若殿とも存ぜず。合圖の拍子木を打つて知らせしは。罪に罪を重ねる業人。ハ、。地勿體なや冥加なやと。立つたり居たり身をもがき。胸に燒鐵八寸釘。フシ打つて變へたる。後悔涙。詞ムヽ扨は聞及ぶ中川宇内とは汝よな。この平治を見知らねば。慮外も不忠も恨みなし。この上は母や妻子を介抱し。寶を持つて。早く都へ立退く用意と。地せけばせく程お春は涙。詞コレなう宇内。地主從の緣朽ちせず廻り逢ひしは。せめての便りと言ひながら。とにもかくにも夫の身の上。遁るゝ筋はない事か。淺ましや悲しやと。スエテすがり着いて伏沈

む。地歎きの内に一間より。嫁御苦しい爰明けてと。聞くよりお春は氣の毒や。また御病氣が發りしかと。障子明くればコハいかに。母は双を貫いて半死半生今はの際。詞ヤアコリヤ何ぢや。コリヤどうぢやと。地宇内も驚き駈寄れば。平治は仰天狂氣の如く。詞コレコレ母人。其お命を大事に思ひ。樣々の憂き苦勞。死なす程なら網も打たぬ。チエ、情ない御仕方と。地恨み歎けばお春もとも〳〵。お前は常々御孝行。私に何ぞお恨みが。あつての事でござんせう。常寵愛の友石が。跡で歎くを不便とも可愛いとも思さぬかと。歎き沈めば母親は。血汐の體起直り。その孫故に今日までは。つらい命を存へしが。詞夫婦の衆の孝行を。思へば餘り嬉しさ悲しさ。心餘りて死にまする。地ならぬ世帶のその中で。長々の病氣の世話。今日や死ぬる明日や冥途のお迎ひがと。待つにつれなき我が命。詞苦勞の上に難儀して。本復させうと孝行な。子は天道が守れども。地守らぬ老の罪科は。我が子に報ひ情なや。千尋の海へ沈めると。思へば一時半時の。息の通ふも恨めしく。命を双に任せしぞや。詞さぞや最前打つ杖を。心なしとも思はんが。叶はぬまでも此家を立退き。命完うさせんが爲。赦してたべ夫婦の衆。地何の因果で今までは。死ぬるにも死に兼ねて。かゝる憂き目をかけるぞと。悲しさ辛さ繰返し。身をかこちたる悔み泣き フシことわり。とこそ見えにける。地平次夫婦は正體も。泣沈めば宇内は差寄り。詞某かくて在る中は。平次樣を罪に沈めは致しませぬ。エ、地早まつたる御最期と。言ひつゝ涙押拭へば。詞ヲ、神佛の惠で。平次が罪は遁るゝ事もあらうが。遁れがたき我が命。死ぬるは兼ての覺悟ぞや。ムンとは又なぜなホゝウ其譯いふも恥かしいが。孫への禮に言聞かす。地友石來いと傍に寄せ。詞婆はこの世に居ぬ程に。必ず跡で尋ねなよ。昨夕そちがして見せた踊を一つ所望せう。サア〳〵早う踊つて見せてたも。地それが冥途へ土產ぞと。いふに友石頑是なく。詞踊なりと何なりと好きな事をせう程に。どつこへも往て下さんなと。地言ひつゝ立つて入れ物の。フシカゝリ袖無し羽織鬘を出し。四手振上げて凛〻しげに。詞ノル殿中ぢや張臂ぢや。嶋さん紺さん淺黃さんと。地踊る姿を見るにつけ。手負ひは今はの聲を上げ。わつとばかりに伏沈む。詞ナウアレアレアレあれを見て宇内。早まつて死ぬるとばし。必ず思ひてたもるなや。夫

婦の衆が母に隠して。孫に踊らせ往來の人に。一錢二錢の合力受け。養ひくれるを此婆々が。嬉しからうか悲しかるまいか。地嘸や二人の親の氣は。鈎の針で脊筋を斷切らるゝよりつらからん。三年四年の我が病ひ。貧苦は無理と思はねど。桂平内兵衞とも言はれし人のその孫が。奴出立の鬢鬘。中乘樣〳〵一文やつて下さんせと。附歩くをどう見て生きて居られうぞ。孫を飼ふより狗兒とは誰がいひ初めた婆故に。いかい苦勞をしたなアと。縋り寄せ引寄せて。可愛の者やと。抱きしめ フシ今を限りの其風情。地平治夫婦は取縋りそれも浮世にある習ひと。諌めても嫌しても其甲斐もなき今端の際。コレなう暫しとあせる内。宇内平治の事。頼むといふが フシ此世の暇乞ひ。フシ悔み泣死に是非もなき。地はつと途方に暮れ居たる。夫婦を諌める折柄に。所の代官奥村兵庫。手の者數多案内を引連れ。詞禁斷の場所へ網打つたる此家の主、遁れぬ上意ぢや縄かゝれ。捕つた〳〵と込み入つたり。地平治騷がず涙を隠し。詞その科は豫て覺悟。サア縄かけられよと地進み出づれば。宇内は手を突き頭を下げ。詞網打つたる科人は。此家の主平治にあらず。この平瓦の治郎藏が。渡世の爲の盗み網。顯はれしは運の盡き。サア寄つて括られよ。と地手を廻せば平治が押直り。詞志は嬉しいが。天命何と遁れんと地押直れば。代官兵庫眉をしはめ。詞己が科を人に塗つても。身を遁れんとするは人情の習ひなるに。互に科を名乘つて出で。死を爭ふは義理ある仲。汝等はこりや主從ぢやな。イヤサ驚く事はない。それをこつちに吟味はせぬ。科人の詮議は一筋。網打つたは平治に極まる仔細は。その場に殘りし菅笠に。平の字と。治の字と。明白に記しあるからは遁れぬ證據。ア、イヤ〳〵。此菅笠が有るからは。いよ〳〵科人は此治郎藏。ヤアこいつこりや血迷うたな。平治と記した菅笠を。おのれが科の證據とは。サレバサ。拙者が名は平瓦の治郎藏。平瓦の平といふ字と。治郎藏の治の字と。頭字をしるし置いたる菅笠。平治とお讀みなされしは無理ならねど。拙者が笠に極まつたと。地危うき難を身に受ける。不思議に文字の合うたるも。フシ是孝行の驗かや。地代官それと悟れども。忠臣を感じてや詞ソレ科極る治郎藏に。縄かけよと地下知の内。あへなや宇内を三寸縄。なういとしやと駈寄るお春。平治も共に縄付の宇内が姿を見る不便さ。我ゆゑ消

ゆる水の泡。鮫や鯨の餌食かと。思ひ。に受けて。脱いで貸したる笠じるし。を訓に讀み。冥途へ。急ぐ一文字。濱
やる瀬も涙の雨。身にふりかゝるを身タ、キ平と平との讀み違へ。音に讀む字邊を。さして別れ行く。